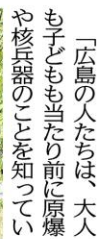


戦後80年
ヒロシマ
から
＝ 随時掲載 ＝

世界中の人と意見交わす夢 広島大生「関わり続ける」



た。

（佐藤光里）

(佐藤光里)

宇佐市出身で広島大3年の奥田弥陽(やなぎひら)さんは、核兵器が使われない世界の実現に向けて、国際政治を学んでいる。「ヒロシマには被爆地として実相を伝える役割がある。私も若者の一人として責任を持ち、ずっと関わり続けたい」。ヒロシマは6日、原子爆弾の投下から80年目の朝を迎える。

広島大への進学は、奥田さんの人生観を大きく変えた。被爆者の話を直接聞く機会があり、「自分には考えられないような経験をしている」と核兵器の恐ろしさに震えた。

て、しっかりと考えている」。小学生の頃に地元の戦跡や特攻隊について学び、おほろびに感じていた問題意識が明確になった。

大学では積極的に平和に関係する授業を受講する。1年生だった20023年冬には、G7広島サミットのレガシープロジェクトの一員として米国に渡った。核不拡散のテーマを専門的に学ぶ現地の大学院生と意見を交わし、「核廃絶についてはさまざまな意見があったが、増やしてはいけない」という点で一致していた」と振り返る。

国際安全保障を学ぶため、来週から米国の大学に留学する。将来は世界中の人と核に関する意見交換をしたいという夢を持つ。「平和だからこそ、家族、友人がいて、学べる環境がある。この生活がずっと続いてほしい」と語った。



〔問①〕 奥田さんは広島で被爆者の話を直接聞いてどのようなことを思い感じましたか。。

〔問②〕 奥田さんが米国の大学院生と意見交換し、さまざまな意見があった中でどのような点は意見が一致していたと言っていますか。

〔問③〕 核兵器に限らず、現代の日本、そして大分県に生きる私たちが80年前の戦争の実相を学ぶためにできることは何でしょうか。考えてみましょう。
